支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

「田植え時季の親の姿 その1」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

農業の仕事の大半が人馬による時代、最も手数がかかるのが田植えだった。

小さい頃、記憶にある最初の田植え時季の風景は、朝から多くの人がわが家にいたこと、そして長い縁側をテーブルにしてご飯を食べている風景だ。縁側にはめいめいのお膳があったような。椅子は木箱に長い板を渡したもの。田植えはぬかるみ中での作業、その靴の履き脱ぎは朝晩のみ、土足のままの食事だった。

稲苗を全て手で植える時代、その人夫の確保が親父の最初の仕事だった。農家は一斉に田植えを始めるので、同じ地域の人には頼めない。海岸地域の半農半漁、あるいは漁業の方々が期待できる人たちだった（そう言えば乳飲み子を抱える若いお母さんも来てくれ、田んぼでの休憩時、小学生の私が乳飲み子をおぶって届けたこともある）。

親父は年末年始あたりから、その家々を回り約半年後の仕事の約束を取り付けた。またそれは、同じくらいの規模を持つ他の農家との雇用競争でもあった。

一番の決め手は、やはり手間賃。過当競争にならないように役所が決めたであろう、各種農作業別の日当の書かれた紙が、障子に貼られていたのを覚えている。手間賃もそうだが親戚、近所の人を通しての縁故で頼んだ、あるいは拝み倒したのもあったようだ。

大半の家庭にマイカーなど無い時代、その送り迎えも親父の仕事だった。そこでトラックで多くの人を運ぶため、後に親父は許可をとった。条件はトラックの荷台に幌（ほろ）をつけること、椅子（折りたたんであったものを下すと、板状の長椅子になるもの）を付けること、乗せる人数を守ることなどの記憶がある。

そして、田植え作業の段取り。田植えをする田んぼの順番と数、それから概算する苗の量と、苗を取る苗代の順番。稲種は2～3種類あったので、一つの田んぼで苗を混ぜるわけにはいかない。

次に、植える田んぼの線引き。手植え故、人夫が植える位置を示すため、縦線横線を引くのである。人夫は、その交差箇所に前進み（地方によっては、後ろ進みあり）しながら植える。植える予定の田んぼに先行して線を引く。引く器械は、いわば大きな櫛の真ん中に一本棒が付いているようなもの。櫛全体の幅は、4㍍ぐらいはあっただろうか。（続く）

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める